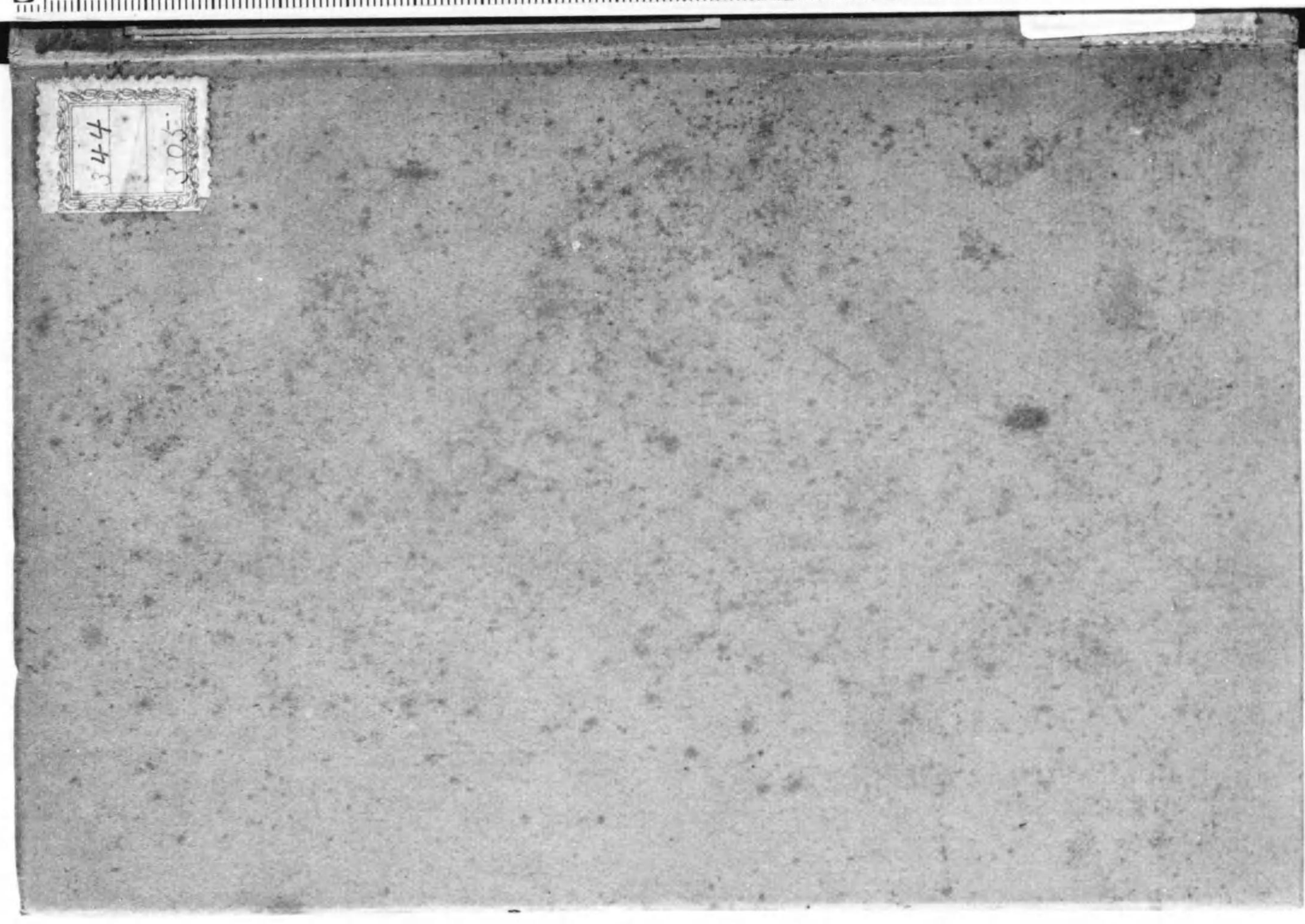
投



344
305

特232
602

詩集 雲と人

杉江重英著

昭和四三・六・一
帝國

344-305

この詩集は自分の第三冊目の作品集である。第二詩集『骨』以後今日まで、滿二ヶ年間に書いたものゝ内から約半數をこゝに收錄した。自分はこの詩集により、採るべきものを採り、捨つべきものを捨てしまつたので、何か落着いた氣持になることができた。自分はこの氣持の中から、更に新らしい出發をしたいと思つてゐる。

一九三二年八月

著者

雲と人・目次

雲と人

この道……一三
道の上に……一四
柩……一六
地上……一八
幻雲……二〇
眠る蝶……二二

血……二三
車……二四
雲と人……二六
瓦……二八
夕暮の詩……二九
動く心臓……三〇
寺……三三
雲の詩……三四
生きる

疊……四三
塵埃……四六
閣魔……四八
雨ふる日……五〇
夏夜のおもひ……五二
山の峰々……五四
うぐひす……五五
花信……五六
科學博物館にて……五八
炭俵の詩……六〇

樂隊……六三
冬の日……六四
古い花……六六
氷……六七
蠅……六八
生きる……六九
年月……七〇
着物……七二
目玉……七四
朝陽の中で……七六

僕の仕事……七八
夕鴉……七九
鳥かげ……八〇
古い地圖……八二

虹と子供達

虹と子供達……八五
夏の日……八七
暗い襖……八八
一枚の羽根……九〇

小さい足袋……九三
繪本の中の子供達……九四
子供の聲……九六
父と子……九八
同じく……九八
朝顔の種……九九
匂ふ風……一〇〇
我が家族……一〇一
妻……一〇四
梅雨の日に……一〇六

雲と人

この道

わたしはこの道をゆく
わたしはわたし自身の影を踏みながら。

わたしはしづかに跫音をたて
その跫音を後(うしろ)に背負うて歩いてゆく。

寒い野末にこの道はつゞいてゐる
その果ての果てまでわたしはゆく。

道の上に

そこには月や星の明りがさし
月や星の中から落ちて來るものがある。
そこには傾いた樹木があり河がある

石があり破れた瓦がある
錆びた銅や鐵がある
風に吹かれてゐる小さい草がある。

夜毎に月や星は地上に近付いて來る
月や星の中から落ちて來たものが
だんだん地面の上にたまつてゆく。

柩

わたしは何物をも持つてはをらぬ
むしろわたしは捨てゝゐる
わたしは何を捨てねばならないかを考へる。
わたしは手に及物を持つて

髪をきり、肉をそぎ、骨をけづる
わたしは滴る血を捨てる
その血の下でわたしは凍えてゐる。

露はになつた骨身に沁みてくる風
その骨の髄の髄にまでわたしはをる
骨はこの世の柩のやうに白くうごいてゐる。

地　上

美しい夕暮の空に
遠い地上からの物音が響いてゐる
一旦地に落ちたものが
またも遙かの空へと驅けのぼつてゆくやうなその物音
あはたゞしいが

しかし奥深い落着と秩序を感じさせる遠い物音
その物音にしづかに耳を傾けてゐると
かなしみある者はいよいよかなしみに洗はれ
よろこびある者はいよいよよろこびに溢れてくる
そしてこの世とあの世との隔てが
紙一重のやうに感じられてくる
そのやうに美しい夕暮の空を日毎に眺め
ひとりしづかにきいてゐる。

幻　雲

雲の上に誰かゞねてゐる
そいつをたゝき起してやりたい
そいつを地面の上に引ずり下ろして
そいつの顏をまともに見
そいつとしづかに話がしてみたい
だが雲は直きに飛んでいつてしまふ
その脚の速さにはかなはない

見てゐるうちに姿を消してしまふ
何處へいつてしまふのかわからない
次の日もまたその次の日も
雲は何處からともなくやつて來る
そしてその上にはきつと誰かゞねてゐるのだ
おれにはそれがはつきりわかるのだが
そいつが誰であるかわからない
おれは何時かあの上へ驅け上り
あいつが誰だかたゝき起してみたいと思つてゐる。

眠る蝶

蝶はあをい葉のかげで
おもたく二つの翅を閉ぢてゐる
涼しげにそよそよと風に吹かれながら
細い枝ごとゆれてゐる
光もまぶしい夏の日を眠つてゐる
蝶はこの世の假の姿である。

血

血は驅けめぐつてゐる
血はその最後の一滴まで赤いのだ
それゆゑ血はほとばしり噴き上げる
血はおれのものであり
おれの最後のものでもある
血は生きながらの地獄の色をしてゐる。

車

車は廻る
廻つてゐる
重たく人に曳かれてゐる
曳く人
曳かるゝ車を見よ。

積まれた荷物は下ろされ
また積まれる
何處までいつても荷物は無くならぬ
何處までいつても道は盡きはせぬ
ああ、重たい車を曳く
この人を見よ。

雲と人

人が死んだり生きたりしてゐる
そのたびに雲の上では燈火が點いたり消えたりしてゐる。

＊

雲はたかい處にあるので
誰もその奥を覗いて見ることはできないのだ。

＊

人はこの世を離れこの世を捨てゝ
また遠い雲の上にかへつてゆく。

瓦

雨に濡れながら
瓦はうつくしく光つてゐる
いつからともなく
瓦は屋根の上にあつたのだ
何人もその上を踏まぬし
何人もその上に降りても來はしない
たゞしづかに瓦はそこに並んでゐる。

夕暮の詩

何處かで羽根をつく音がしてゐる
その音をきいてゐると
何か美しいものが轉り落ちてくるやうな氣がする
落ちてまた元の空にのぼつてゆくのであらう。

動く心臓

おれの心臓はうごいてゐる
その上に指をあてると
指もまたうごいて止まらぬのだ。

おれはおれの胸に顔をうづめ
うごく指先をみつめてゐた

そしておれは顔をあげた。

おれは大きく伸び上り息をした
おれは吸はねばならず
また吐かねばならぬ。

おれの心臓をうごかす者は
息するおれの他(ほか)のものだ
おれはたゞ吸ひ吐くだけだ。

寺

わたしは石段を一つづゝ降りる
石段の上には
松の落葉がたまり

夕陽が遠くからさしてゐる。
頭の上でしづかにタベの鐘が鳴つてゐる
わたしはその響の中に立ちどまる
それからまた
わたしは石段を一つづゝ降りる。……

雲の詩（断片）

1

雲はたゝかふ
雲は劍をかくしてゐる
雲は戰車のひゞきをたてる。

2

雲は天使と共にある
雲はまだ翔ぶことを知らぬ幼い天使達のために
綿の翼をかしてやる
溫い寢床もつくつてやる
さういふとき雲は老人のやうに親切でやさしい。

3

何ものにも據らぬ雲
何ものにも隨かぬ雲。

4

雲は時々地面の近くまで降りて來る
何處かに子供でも泣いてゐると
直ぐにその側へ飛んでゆく
そして樣々の美しい虹のすがたを現はす
すると子供の涙はいつの間にか乾いてしまふのだ。

5

泣いた後の子供の瞳をのぞくと
そこには碧い空のいろと
雲のすがたが繪のやうに映つてゐる。

6

雲をおさへてみたい
群がる雲の中をかき分けて
ずんずん歩いていつてみたい
ゆき着くところまでいつてみたい
いくら年をとつてもかまはない
歩きながら雲の中で死ねるなら死んでみたい
死んだらまたわたしは地面の上に墜ちて來るかも知れぬ。

7

風のない日の雲は凝乎としてゐる
雲は少しもうごかぬ、うごかれぬのだ
雲はぢりぢりしてゐるやうだ
何者かに挑むやうな恰好をしてゐる
今にも割れ裂けて
摑みかゝつて來さうな氣配を見せてゐる
だが雲はうごかぬ
うごかれぬのだ。

8

一坪の庭の上にもやつて來る雲
その小さい雲の影が落ちてゐる。

9

雲は荒々しい
雲が怒り殺到する時
打ち合ふ鋼鐵のやうに火華をあげる
それゆゑ人々は雲を怖れてゐるのだ。

生きる

疊

僕等は疊の上に坐つてゐる
疊の下を年中さむい風が吹いてゐる
僕等の小さい家族の人々をのせて。

僕等の何時からともないこの世での生活
この狭い疊の上での生活
あまり遠くもない僕等の過去が
あまたのシミとなつてのこつてゐる。

それらの時から日をかぞへる
月をかぞへ年をかぞへる
あまり遠くもないであらう僕等の未來をもかぞへる。

さうして僕等は生きてゐる

坐りながら起ちながら
日に日に狭くなつてゆく疊の上をゆき來しながら
シミの上にまた新しいシミを重ねながら
僕等は幾度もそれを裏返さねばならぬのだ。

塵埃

三百六十五日おれは起きる
おれは起きて着物を着る
床をたゝみそれをしまふ
おれは窓を開ける

掃き出だす。
朝に日に
盡きない埃が庭にたまる
そして風が吹き
その埃を吹き飛ばす。

閻魔

われもし閻魔なりせば
汝の舌を抜いてもくれんに
されどこの世に
閻魔のごときはあらじ。

あの世にゆかば閻魔はあるものか
それをおもはゞ
汝はこの世にながく生きざるべからず
いとうまきもの鱈腹くらひて
いちにちも命のびんことをねがひ求めざるべからず。

雨ふる日

くらく雨ふる日街をあるきしに
あるたべもの店のいりぐちに
「なめくぢ料理あり」と書けるはり紙を見たり
人はへびをたべかはづをたべ

でで蟲をたべ
いままたなめくぢをくらひてよろこぶなり
ほかにくらふべきものなしとは言はさじ
あまりに氣味あしくて
むねわるき思ひをなしぬ。

夏夜のおもひ

わがおもひこよひ鬼のごとくなり
われは痩せたる鬼
蚊帳ぬちに打臥して
ひとり息づけり
蚊帳は青く燃ゆる焔のごとく
わが息にゆらめき消えむともせず。

われは鬼なるか、あらず
されどこのおもひ
こよひまこと鬼のごとくなり
わがかたへにして眠れるをさな兒のうへに
こよひ青き焔のごときものの飛ぶはなんぞ
なんの兆(きざし)ぞ
われはその怪しき焔のごときものをひとりうちまもり
しばし茫然とねたりしが
やがてまたこころなごみて打臥しぬ。

山の峰々

たかき山ありひくき山あり
人々はのぼりてたかき山に到らんとす
年毎に人々あまた命をうしなひてかへりきたりぬ
亡せたる人々の命たかき山の峰々にのこりて
また年毎にあたらしき友をや招ぶならむ。

うぐひす

風のある日は障子をとざして
ひとりでその中にをる
凡ての風の物音を
僕の耳の眞近くにきく
風の中の小さい部屋で
僕の耳はまた遠い鶯の聲をもきいてゐる。

花信

花の咲いてゐるあひだ
僕はどこへも出ないだらう
風や雨の物音を僕は部屋にゐてきゝ
それをひとりで怡しみ

おだやかに一日をくらすだらう
花は雨や風にはげしく散り
人々の頭に降り顔にあたるだらう
それらの人々が歸つて來ない間に
僕はひとりでこつそりと寢てしまはうといふのだ。

科學博物館にて

幾百年幾千年もの昔生きてゐたもの
動物や植物や
魚や貝や
それらのぼろぼろになつた化石標本の上に

陰鬱なしかし程よい暗さの光線が流れてゐる
僕はしづかにさういふものを見て歩いてゐるうちに
いつか周圍(まわり)の薄暗さにも慣れてゐた
僕は地球といふものが
どんなに古いものかといふことを考へてゐたのだ。

炭俵の詩

道端に捨てゝある炭俵
風の吹くたびにざわざわうごいてゐる。

炭俵、炭俵
手もなく足もなくて
そのうへ腸(はらわた)もなくて

たゞ捨てられ落ちてゐる炭俵。

誰人かその中に寢てをるのではなからうか
せむしのやうな男でもよい
かたわのやうな男でもよい
一寸法師のやうな男でもよい。

誰人かその中に寢てゐるのなら
そつと手を出し
足を出し

首を出してみせないか。

炭俵、炭俵
だが誰人もその中には寢てをらぬ
吹いてゐるのは寒い風ばかりだ
さわざわと寒い風ばかりなのだ。

樂隊

窓の下を樂隊が通つた
おれは机の上に顏を伏せて
それが聞えなくなるまで凝乎としてゐた
樂隊はだんだんおれの耳の奥へ消えていつた
そして聞えなくなつた
おれはやつと顏をあげた。

冬の日

張りたての障子に
白くなゝめにさしてゐる冬の陽
陽がかげると急にくらくなる疊のうへ。
はや短いいちにちが昏れるであらう

はやく賣らねばならぬ
賣つて錢にかへねばならぬ
アサリムキミハマグリ、
サホダケヤサホダケヤ、
物賣りいそぐ人々の呼聲。
かくて陽は落ち夜がくる。

古い花

雪解のぬかるみ道がつゞいてゐる垣根
垣根越しに温い縁先が見える。

青樹のかげに紅い梅の蕾が
もはや世にない風流さをひとり偲んでゐる。

氷

しづかな枕許で氷の裂ける音がした
その音がいつまでも耳についてはなれなかつた
裂けた氷と氷の狭い間から
こぼれるやうに光が地上にあふれ出て來るのがわかつた
光は眠つてゐる子供の二つの瞼にも沁みてはいり
温い蕾のやうにやさしくそれらを割つてゆく。

蠅

蠅は一匹だけでゐるときが一番美しい
その蠅を腕にとまらせて
ひとりでしづかにみつめてゐると
何か神聖なものを感じるのだ
不滅に貫く意志を感じるのだ
眼には見えない千萬の同族が
彼の背後から簇り出でて來るやうに感じるのだ。

生きる

昨日のやうに今日がある
今日のやうに明日もまたあらねばならぬ
自分はそのことだけを信じて生きてゐる
その氣安さの中に生きてゐる
自分は何ものをも否定するのではないが
しかもたゞ一つの信ずべきものゝ中に生きてゐる
さうだ、自分には否定すべき何ものもあるのではない。

年　月

おれは三十三年生きた
おれはおれの
痩せた肋骨の數よりも多くの年月を生きた
おれは三十三年生きねばならなかつた。

おれは何だかバカらしい
奴等のやうに
おれも生きてゆかねばならぬといふことが
奴等のやうに
おれも頭の中に
ゴミをためながら生きてゆかねばならぬといふことが。

着物

よごれた着物を脱いで
それを陽にあてゝおいた
風が吹いてくると
擦り切れて口を開いた裾のあたりが

裏返しになつたまゝでうごいてゐるのだ
自分はそこに突つ立つたまゝで
しばらくそれをながめてゐた。

擦り切れてしまつたのは
このよごれた着物の裾ではなくて
痩せたおのれの足ではなかつたのか。

目　玉

陽がかげると
おれの部屋は急に暗くなる
おれは眼鏡をはづし
それを拭いてゐる。

眼鏡のないおれの眼には

何も見えはしないのだ
それゆゑ二つの目玉はずんずん沈む
重く冷たい
それは二つの義眼のやうに。

おれは眼鏡を膝の上に置いたまゝ
何時までも動かず凝乎としてゐる
見えない二つの目玉で何かを考へてゐる。

朝陽の中で

朝の食事がすむと
僕は二階に上る
部屋の障子を開け放ち

いつぱいに射しこむ朝陽の中に
僕は坐つてゐるのだ
僕は次第に溫かくなる
僕は僕の內から蒸發してゆくものを感じる
僕は僕の感情がカサカサに乾燥してゆくのを感じる。

僕の仕事

僕は小さい仕事をする
その仕事の中で僕は疲労する
僕は大きい仕事がしたい
大きい仕事の中で僕の疲労を恢復したい
さういふ仕事が何處かにないか。

夕鴉

飛んでゆく鴉
またその後からも飛んでゆく鴉
空は昏く
夕鴉はたゞひと聲しかなかぬ
その深いしづけさの中に
人も默つて歩いてゐる。

鳥かげ

鳥かげが障子にうつり
それが何時までも消えずにある
そして時々小さくうごいてゐる
啼いてゐる
啼きながら障子のうへをあるいてゐる

僕は机の上に腕をおいて
それをながめてゐる
僕の机は古く
その上に埃をためてゐる
机は僕の腕の下できしみ鳴つてゐる。

古い地圖

僕は一枚の古い地圖を持つてゐる
僕はそれを大切に折りたゝみしまひこむ
時々取り出してはひとりで眺める
僕の半生をその上によみたどる
處々シミが喰つて孔があいてゐて
孔の下から疊の目がのぞいてゐるのだ。

虹と子供達

虹と子供達

美しくはれた夕空の彼方に
かすかに揺れながらかゝつてゐる虹
やがてその虹のうへに
走りのぼつてくる小さい子供達
彼等は互ひに手をつなぎ合ひ
浮々と跳びかけつてゐる
虹

そして今にも足を踏みはづし落ちさうになる
虹の頂に立ち何やらうたひはじめる
その歌ごゑがかなしく地の上にまでひゞいて來る。

夕空がうすづきはじめて來ると
虹もまた次第に影を消してゆく
子供達の黑い小さな頭だけが
黝んだ空の彼方にいつまでも殘る
それらも見えなくなつてしまふと
歌ごゑもまた何時しか聞えなくなつてしまふのだ。

夏の日

子供はぶらんこの上で眠つてしまふ
綱をひきゆすぶつてゐる父親の手は力なく
小さい二つの瞼を呼んでゐる
ぶらんこは物倦くうごいては止る
晝はしづかに疊の上に青い影をおとして音もなく
眠れよ、眠れよ、わが子。

暗い襖

ふるびた唐紙に小さい頭を寄せて
子供はひとりで何かうたうてゐる
渦巻く暗い浪と

その上を飛ぶ鳥の繪が描かれてゐる
子供にはその鳥が鳩になつて見えるのであらう
覺えたばかりの鳩ぽつぽの歌をうたうてゐる
雨が降つて外へ出られなくなると
子供は歌でもうたうてゐるよりほかに仕方がないのだ。

一枚の羽

毎日のやうに
わたしは外に出て木の葉をあつめた
それがだんだんたまつた
わたしはそれらを一枚一枚丹念に重ね合せて
その上に寢た。

わたしは青い野天の夢をみた

天使達が毎日のやうに遊びに來た
彼女達は小さくて綺麗な紙片のやうな顔をして
綿毛のやうに輕い身体付をしてゐた
彼女達は寢てゐるわたしをこづき起し
わたしを伴れて
千里もある遠い雲の上を翔ぶのであつた。

雲の上で
わたしは白く光るものを見た
一枚の羽が矢のやうに飛んでゐるのだ

わたしはその羽の墜ちてゆく方向を見定めた
ほのぼのと人家が見え
僅かな雲の隙間から
羽は下界へと抜け墜ちていつた。

何時の間にか羽は見えなくなつた
そしてわたしもまた墜落した
わたしは眼をさました
木の葉の輕い寢床の上で
その寢床の中からわたしの子供が生れたのだ。

小さい足袋

まだ乾かぬ小さな足袋
そのうへを寒い風が吹いてゐる
赤い足袋の色が
いたいたしく眼に沁みる
明るい庭の葉のない枝に
それが吊り下り搖れてゐる。

繪本の中の子供達

さくらの花が咲いてゐる
もうそろそろ散りかけてゐるのもあるらしい
だが散つた後からでも
さくらの花はまた次々と咲くのであらう
向うの樹の下や
こちらの花のかげで
子供達がたはむれ遊んでゐる

誰も仲間はづれにされてゐる者は一人もゐないのだ
見てゐると
しんからたのしく浮々して來る
この澤山の子供達の中に
わたしの子供もをるのではないか
わたしはその繪の中から
一番可愛らしい女の子を一人探し出した
その小さい女の子は
一匹の犬を追うて驅けてゐるのだ
わたしは何だか嬉しくて仕方がなかつた。

子供の聲

朝の食事の後かたづけをすました妻が
子供を連れて何處かへ出かけてゆく
子供は母親の背で何かを叫ぶ

机に對つてゐる僕は
そのたびに何かを僕の内に取り戻す
僕は子供の聲をきいてゐる
子供の聲は次第にわが家を遠のき
街の向うに消えてゆく。

父と子

朝陽の中に育つてゆくわが子
その父は朝陽の中に坐つてゐる。

同じく

わが子は母の背に負はれ
街に出て幼い歌をうたふ
その父は机の前でいちにち詩を書いてゐる。

朝顔の種

朝顔の種が疊の上にこぼれてゐる
子供らはその上を踏んで歩くのだ
僕はその種を一つづゝ拾ひあつめ
また垣根の下へ捨てゝおいた。

匂ふ風

風が吹いて來ると
僕の家の軒端は襁褓の波のやうになる
その一枚ごとに沁みてゐる匂ひの中で

僕の皮膚は洗はれる
匂ひは僕の皮膚に沁み
手足に沁みる
軒端をのぞいてゐる一羽の雀の顏が
小さい一人の人間の顏になつて見える。

我が家族

わたしはわたしの家族を引連れて歩く
新しい家を求めては
そこへ移つてゆく
わたしらはめいめいに重たい荷をはこび
その荷の重さの中で歎息する。

そこでは見知らぬ人々がわたしらを眺め
わたしらもまたそれらの人々の顔を眺める
そしてわたしはわたしの家族と共に
この新しい家に初めての夜を眠り
新しい明日(あす)の日を起きて出る。

妻

彼女は終日家の中にゐる
何か縫物をしたり
水を汲んだりしてゐる
しづかに一人で茶を飲み
本を讀んでゐる

彼女は疲れると脚を伸ばして
冷たい疊のうへに横臥はる
開け放しておいた窓から白い蝶が舞ひこみ
それが緣側の方から外へ抜けてゆく
彼女は自分の白い脛を撫でゝみてゐる
屋根のあちらの方で
しらじらとまだ櫻の花が咲いてゐる。……

梅雨の日に

雨がはれて
薄い陽がさしてくると
女は蚊帳を干しに庭へ出てゆく
釣手の輪がすゞしい音をたてゝ空に鳴つてゐるのだ
その音をきいてゐると
眼がさめたやうにからりとした氣持になつた。

詩集
雲と人

昭和七年九月十五日印刷
昭和七年九月二十日發行

金壹圓

著者　杉江重英

發行兼印刷人　中村勝一

東京杉並高圓寺八五七

發行所　東北書院
振東四六二八一番

東北書院印刷部印行・谷合製本

東北書院刊行書目

詩集 紫羅欄花	河井醉茗著	貳圓	送八錢
詩集 雲と人	杉江重英著	壹圓	送八錢
歌謠襍稿	湯朝竹山人著	貳圓	送十錢
現代イギリス詩集	喜志邦三譯	八拾錢	送六錢
スペイン民謠集	喜志邦三譯	貳圓	送十錢
詞華選南有集	月原橙一郎編	貳圓	送十錢
昭和詩人選集	月原橙一郎編	壹圓八拾錢	送十錢
松村又一選集	松村又一著	貳圓	送十錢

終